

歩くだけの非日常

一年五組 宮元千星

「夜のピクニック」というタイトルから、お弁当や水筒を持つて公園に行き、文字通り夜にピクニックをする話だと思った。ピクニックは大抵の場合、朝や昼にするものだから、夜にピクニックをするというのはいくらどういふことだろうとワクワクした。この作品は、終始そんな「非日常のワクワク感」がある。

朝から翌日の朝まで、八十キロを歩き続ける学校行事「歩行祭」。「夜のピクニック」は、約四百五十ページの初めから終わりまで、三年生の主人公たちにとつては最後の歩行祭の様子が、淡々と描写される。

物語は主人公の女子高校生、甲田貴子の視点と、同級生の西脇融の視点が交互に描写され、進行していく。貴子と融は異母きょうだいである。双方とも、それぞれの母親と二人暮らしをしている。しかし、貴子と融はまともに会話を交わしたことがない。貴子は、自分は融に嫌われていると思っている。融は、貴子にどう接したらいいか分からない。二人はぎくしゃくした関係なのだ。貴子は歩行祭中である賭けをしていた。それは、融に話しかけて、返事をしてもらうこと。この賭けは、物語の中盤において成功す

る。

貴子と融は似ている。それは外見だけではない。作中でも彼らの友人たちが言及しているが、性格の根本的なところが同じ成分で出来ているのである。ダイヤモンドと黒鉛は違うものだけれど、両方とも炭素から成っているのと同じだ。歩行祭終盤、友人たちの協力もあり、貴子と融は初めて二人できちんと話をすることになる。その時、融は貴子の言動一つ一つに「貴子らしい」と思うのだ。今までまともに話をしたことと近づいたこともなかった貴子に「貴子らしさ」を感じたのは、貴子のことをよく見ていたからだ。そしてやはり、根本的なところに似通ったものがあるからだと思う。その理由が「血の繋がりが」なのかどうかは私には分からない。しかし私は、そんな付かず離れずの二人の関係性が面白くもあり、不思議であると思う。

親友である戸田忍が、融にこう語るシーンがある。

「雑音だつて、おまえを作ってるんだよ。雑音はうるさいけど、やつぱ聞いておかなきゃなんない時だつてあるんだよ。」

私は、この言葉に深く心を動かされた。そして、ここでいう「雑音」とは一体何なのか考えた。おそらくは後悔、失敗、心の惑い、それら諸々の一見いらなないと思えるものが「雑音」なのだろう。しかしそれらの「雑音」が今の自分を形作っている。つまり「雑音」がなければ今の自分は存在しないということなのだ。どうでもいいことでも、実はどうでもよくなかつたりす

るのだ。融は、母と自分だけの狭い世界から距離を置きたいと考えていた。そのために「雑音」をシャットアウトして、早く大人になろうとしていた。そんな融は、歩行祭の終盤でこう悟る。

「今は今なんだ。今を未来のためだけに使うべきじゃない。」

今しか聞けない「雑音」があり、それはその機会を逃せばもう二度と聞けないものだ。忍の言葉を受けて私は、自分の過去の「雑音」を肯定されたような気持ちになった。

歩行祭では、数時間の休憩と仮眠を除けば、夜も歩き続ける。心理学の本で知ったことだが、人は暗い場所では本心を言いやすくなるそう。相手の姿がよく見えないからというのが、理由の一つである。だから歩行祭は、普段はなかなか出来ないような話ができる。心のブレーキを少しだけ緩めることができるのだ。

貴子が融と交流を図ろうとしたのも、普段は落ち着いている忍が親友に熱く語つたのも、歩行祭という一見地味に見えて実はなかなか非日常の行事だからこそできたことなのかもしれない。歩行祭の終盤に貴子は、普段出歩くことのない時間帯から、見慣れた朝の時間帯になつていくことを「非日常の世界から普通の世界に戻ってきた」と表現している。歩行祭は、非日常と日常の境目を体験できる行事なのだ。

私は歩行祭を初めて知った時、なんてしんどそうな行事なんだと思った。歩くだけ。長い距離をただ歩くだけである。

しかも貴子たちの通う北高ではこれが修学旅行の代わりだというのだから、一体どんなビッグイベントなのか非常に気になつてた。しかしいざ読んでいくと、残つたページが薄くなつていくことに、歩行祭の終わりに寂しさを覚えてきたのである。私はいつの間にか貴子たちと一緒に、歩行祭という非日常の行事を楽しんでいた。

「みんなで、夜歩く。たつたそれだけのことなのにね。どうして、それだけのことが、こんなに特別なんだろうね。」

貴子の親友の一人である杏奈のこの台詞に、この物語の全てが詰まつている。私は「夜のピクニック」を通して、「雑音」だらけの今を楽しもうと思えた。